

現代のことば

やまだ
山田 奨治



スーパーやコンビニでいつも気になることがある。レジで精算をしているときに、客と店員のあいだの会話が聞こえる。ほとんどの客はだまって買い物かごを差し出し、無言のまま精算を済ませて立ち去る。店員のほうはマニュアルどおりのあいさつと値段の復唱をしているだけだ。バーコードリーダーの「ピッ」という電子音だけが、高く鳴り響いている。そんな光景があたりまえになっていることに、いまの日本社会の不気味さを感じてしまう。

数年前にイギリスで暮らしたことがある。スーパーやコンビニのレジの雰囲気は、日本とはちがう。買い物かごをもって行くと、店員は「ハロー」「ハイヤー(やあー)」と気さくに声をかけてくる。マニュアルなどないようで、みな思い思いの自分のことばでコミュニケーションをしかけてくる。客もそれに応じてこたばを返す。精算のあいだ、しばしのおしゃべりがつづく。別れぎわにはお互いにしっかりと目を合わせ、笑顔で「サンキュー」「バイー」という。

情報力をつける

イギリスは日本よりも住みよいは思わないが、見知らぬ者どうしが声をかけあつこの習慣は、見習いた

いと思った。もちろん、仕事に集中してないので、処理ミスが起こりやすい。それでも、無言で電子音だけが響いているよりも、ミスはあつても短いおしゃべりを楽しむほうが、いい社会だとわたしは思う。

スーパーでのやりとりのような日常のことも、わたしが研究している情報学の観点から考えることができる。日本のスーパーでみられるようなマニュアルどおりの会話は、密度の低い定型情報の、店員から客への一方的な伝達にあたる。イギリスの場合は、日本よりは密度の高い非定型情報を、双方向に伝達している。人間関係を作っていくには、イギリスのスーパーのようなコミュニケーションのほうが効果的だ。

ところが、後者のようなコミュニケーションを円滑にするには訓練がいる。言語の運用能力だけでなく、表情や声、しぐさから相手の感情を察して機敏に返答を返せる機知も必要だ。情報学的にいえば、相手の状態を探索し、それに応じた最適な解を迅速に出す能力にあたる。

そのせいで、社会を作っていくうえで不可欠の、人間関係を作るための多様な能力を育てる機会が奪われている。それだけでなく、複雑な問題

を理解し、すばやく解答を考え、それをわかりやすく表現し、協力しながら解決策を実行する能力も、育ちにくくなってはいないかと、わたしは感じている。

この部分は公開に不適切なため削除されています。

わたしとおなじような問題意識に立って、総合的な情報学に基づいた教育課程を作る試みが、滋賀大学教育学部附属中学校ではじまっている。その先生方は、情報教育を単なるパソコン利用とは考えていない。生徒の学習活動そのものを情報の観点からとらえなおして、情報の本質を探究し、活用を実行し、内容を吟味する力を育てることを軸に授業実践を行っている。どれも現代人に必須の能力だが、これまであまり体系的には教えられてこなかった。初中等教育の関係者は、ぜひ同校にお問い合わせのうえ、授業を参観されることをお勧めする。

(国際日本文化研究センター准教授・情報学)